

開業医、2年が過ぎて

**富山 幹**富山皮膚科
(茅ヶ崎市)

一昨年の6月、以前からの父の体調不良のため日本医科大学皮膚科を退職し、父の診療所を手伝う形で医院診療を開始しました。当初はまだある程度余力のあった父と診療を分担し、自分の担当以外の日には週のうちかなりの日数を大学の外来、カンファレンスや学会などに出掛けようと考えていました。更に趣味を育てるなど人生の幅をひろげる時間にも当てようなどと甘い考えを持っていましたが、状況の変化が私の開業を待っていたかのように次々と起こり、あっという間に勤務表はオセロゲームのごとく私の名前で埋め尽くされてしまい、今では趣味どころか全く身動きがとれなくなっていました。

しかし、新規開業される多くの先生方が経験する開業時の苦労を私の場合はしておらず、経営や人材面では父やベテランスタッフの皆さんに支えてもらい、私はただ診察に集中すれば良いという極めて恵まれた環境でスタートできたことは確かだと思います。元々いつかは町医者になることが理想でありましたし、一時でも親子で診療を共にする時期を持たたことは良かったなど満足しています。職場は通っていた小中学校も近所という正に地元ですので、私がまだ小学校時分から友人・知人も患者さんとして来られ、つい雑談で診療時間が長くなってしまいますが、地域の方達と診療時間を通じてより人間味のある交流が持てるため、診療時間は基本的に和やかで、診察終了後、遅くまで残務に追われても、夢中でさほど苦労に感じません。しかし自宅に帰り着き、遅い食事を済ませると、もうほとんど何をする力も残っておらず、知らぬ間に眠ってしまいます。

長期的に蓄積した疲れを解消すべく、うまい時期に休暇をとってリフレッシュをしたくても、融通し合う同僚はいません。とにかく、仕事が生計から切り離される時間は案外開業医の方が少ないのだと、最近実感しました。病院勤務時代には医局の先生方をはじめ、たくさんの病院スタッフで成り立っていた業務の多くを1人で担うのですから、これは当然の結果でした。プロ野球の流行語を借りれば、開業医のスタンスは、ある程度「俺流」で気まま、しかし常に「代打俺」です。日々の仕事はやりがいがある楽しいですが、いつかは直球以外の球種も覚えて、新たな喜びを模索しないと、長期的には疲労と皮下脂肪ばかり溜まってしまいそうです。

たった2年の間でも、乳児湿疹の生後間もないベビーだった子供が母親と久々に受診に来て表情豊かに言葉を話し、トコトコ歩いて帰ったり、あどけないニキビの中学生だった男の子が声変わりし見るうちに背が伸びて、診療後に大人びた様子で礼を言いながら古い診察室の出入口に頭をぶつけぬようにくぐって帰っていく姿などを見ていると何だか嬉しいですが、気づいたらあっという間に、自分も“おじいさんせんせい”と呼ばれる日が来るのだろうかと感じてしまい、あらためて1日1日を丁寧に積み重ねていかねばと思います。

最後に、私に診療する喜びを与えてくださいました指導医の先生方にはこの場をお借りして、あらためて感謝申し上げます。またこれからも診療に喜びを感じ続けられるよう努力したいと思います。今後ともよろしく願い申し上げます。

不自由な電子化

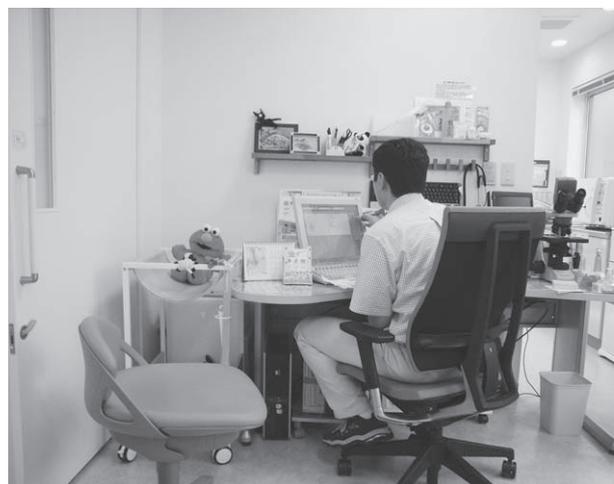
村松重典

おしげ皮フ科クリニック
(平塚市)

平成19年5月に平塚市入野にて開業させていた
だくと同時に、神奈川県皮膚科医会に入会させて
頂きました。私は、愛知県に生まれ、静岡県で幼少
時代を過ごし、1度目の学生生活を神奈川の藤沢で、
医師を志した2度目の学生生活を青森県の弘前で過
ごしました。卒業後は、妻の仕事の都合（学生時代
に東京で会社勤めをしている妻と結婚をしたため、
妻に食べさせてもらっていました）もあり、東京の
順天堂にお世話になりました。本格的に開業を考え
始めたのが3年ほど前のことで、関東近県を色々
まわりましたが、良い縁がありまして現在の平塚
市入野に「おしげ皮フ科クリニック」を始めること
ができました。

開業してようやく半年近くが過ぎ、開業前に抱い
ていた様々な予想・想像・妄想と日々突きつけられ
る現実とのギャップを修正しながら、なんとか診療
を続けています。今回は、せっかく頂いた機会です
ので、そんな私の開業前に抱いていた妄想の中で一
番大きいと感じた現実との違いをご報告させて頂
きたいと思います。

それは、結論を先に申し上げますと「電子化→非
効率化」であります。インターネットがこれだけ普
及し、携帯電話がこれほど進化をとげる世の中で電
子カルテ・レセコンをはじめとする医療分野はなぜ
これほど進歩していないのでしょうか……。私が開業
準備を始めたときに迷いなく決めたのは、クリニッ
クの名称と電子カルテの導入でした。理由は簡単で
「字が汚すぎて読めない」からです。かなり早い時
期から色々なメーカーの電子カルテの検討を始め
ましたが、2～3社の説明を聞いた段階で、理想との
ギャップに愕然としました。紙カルテの良さは、様々
な情報を1枚の紙の上で同時に読み書きができるこ
とにあるのですが、電子カルテはすべてが階層構造
になっていて、1つの入力を完成するまでにいくつ
もの引き出しを開かないと処方入力1つでさえま
まならないのです。私はコンピューターの詳しいこと



電子カルテに苦悩する様子

はよくわかりませんが、人並みには使える方だと自
負しておりました。しかし、あまりの使い勝手の悪
さに頭を抱えてしまいました。電子カルテの話題が
マスコミに取り上げられると、必ずと言っていいほ
どその「進歩」や「便利さ」よりも、診察中に画面
ばかりを診ている医師への「不満」の声が挙がりま
す。しかし、自分をもっと早く扱えるだろうから大
丈夫だと思っていたのですが、いざ使ってみると自
分の考えの甘さを思い知らされました。今思えば、
その時点でペン習字でも習いに行く方がよかったの
かもしれません。仕方なく導入を決めた電子カル
テを、開院2か月前には自宅に設置し、如何にご機
嫌よく電子カルテに作業をさせてもらえるか考え、
作りこみをしました。しかし、実際に診療を始めて
診察と同時進行で入力をする、どうしても「患者」
さんではなく「画面」に向かってしまいます。私の
ような若輩者は、なるべく患者さんと向き合って話
をして、すこしずつ信用を築きあげなければなら
ないわけですから、画面と向き合う時間を極力減らさ
なければならず、仕方なく現在は、診察中はキーボ
ードのみ入力し、患者さんが診察室を出てから大
急ぎで入力をするという方法を取っています。

電子カルテに関連してもう1つ悩んでいること
が、他の機器との連携です。皮膚科は目に見える疾

患ですから、診察もビジュアルを意識しまして、顕微鏡もCCDカメラ付き、ダーモスコピーもデジタルにしました。加えて、待ち受けシステムも導入し、待ち時間対策を行うことにしました。私の頭の中では、電子カルテを含めこれらを1つのモニターを使って管理しようと考えました。しかしながら、メーカーいわく「セキュリティ」の都合上、電子カルテはインターネットに接続すると情報漏洩に関して責任を持たないとのことで、まず待ち受けシステムとの連動を断念しました。また、外部機器と接続はできてもソフトを入れると不具合を生じる可能性があるためソフトは入れられないとのことで、電子カルテは単独で使わざるを得なくなりました。仕方なく、電子カルテとそれ以外でのモニター2台による運用を始めたのですが、待ち受けシステムの管理画面にはその日の診療申し込み患者さんの名前が一覧として表示されるため、プライバシーの観点から好ましくないという結論に至り、結局、私の診察机の上にはモニターが3台も並んで非常に煩雑になってしまっています。電子カルテの展示会などでは色々な画像を取り込んでカルテに貼り付けて同時に表示したりしてアピールはしてくれるのですが、その形を作るまでの手間がかかりすぎます。情けない話です

が、皮膚科医でありながら、臨床写真すらまだほとんどとれていないのが現状です。

今年の夏に行われたホスピタルショーを眺めても、まだまだ「紙カルテ」に勝るものは出てきそうにありません。最近では電子化の進歩に期待する気持もだんだん薄れ、なぜ「紙カルテ」が否定されなければならないのか……と考えるようになってきました。そもそも、医師の字がすべて正確に「読む」ことができれば「紙」もしくは「紙方式」のままでもいいのではないかと。「紙のような入力装置」に記載をし、それがデータとして保存されれば済む話ではないか？ 今回の開業を通して私なりに今後の医療を考えた上での結論は、電子カルテではなく「紙方式」のカルテに立ち戻るとともに、正しく「記載」できるように、書道なりペン習字なり何らかの「書き方講座」を大学まで継続する。色々な意味で、これが最も今後のためになるのではないかと考えています。もし、メーカーの方でご賛同いただけるようでしたら是非、開発の方をご検討いただければと思います。

1日も早く、医師にも患者にもやさしいIT化が進むことを願いつつ、診療を続けていきたいと思えます。

2回目の開業

神皮の開業シリーズは皆様フレッシュな方々ばかりが執筆されていますので、宮本先生から開業シリーズへの投稿依頼をいただいた折には、干からびた私には何が書けるのかと戸惑いました。しかし、千葉と横浜で2回開業した事を紹介して、その責を果たしたいと思えます。

私は昭和48年3月に昭和大学を卒業し、5月の医師国家試験発表の2日前に結婚式を挙げました。その後、順天堂大学皮膚科医局に入局させていただきました。宮崎寛明教授の結婚式の御祝辞は“2年間はしっかりと研修に励むこと”というものでした。



真田妙子

真田皮フ科
(横浜市都筑区)

そのお言葉通り2年間は臨床研修に専念しようと思ったのですが、約束に少し違反し、丸2年目の結婚記念日に長男が生まれました。その1年5カ月後には長女も生まれ、多少パニック生活が続きました。こんな状況の“いいかげん”な女医にも、宮崎教授をはじめ現在の理事長でいらっしゃる小川秀興教授や医局の先生方には温かなご理解を頂き感謝しております。子供が1歳と2歳になるのを待ち、医真菌学が御専門の黒田和夫先生のいらした江東病院に常勤医として勤務し始め、その後は大学に戻って学位を取らせて頂き、そして下の子供の中学入学と

同時に開業いたしました。

医事新報の広告でたまたまJR幕張本郷駅前の医療ビルを見つけ、立地条件の良さと自宅から近いことで即決しました。ここでの2年半は、開業の予備練習をしたようなものでした。最大の失敗は、職員の募集でした。すでに他の皮膚科で何十年も働いていた年上の看護師さんを採用し、経験の浅いことを散々バカにされた事もありました。逆に未経験の若い方にやたらとかき回されました。どんな方と相性が良いのか、血液型や星占いも本気で試してみましたが、とどのつまりは性格の良い方をお願いするしかないという簡単なことがやっと分かった次第です。2年も過ぎ、業務もやっと軌道にのってきた頃、千葉から横浜の病院へ通っていた夫が、2時間かけて帰宅後すぐにまた緊急手術の為に横浜へ戻るという生活が続いている姿を見ていられなくなり、転居を決めたのでした。こんな矢先、有難いことに皮膚科の医局の先生が快く後を引き継ぐとって下さり、心置きなく横浜で新規開業することができました。

横浜での開業場所を決めるまでは、多少手間取りました。業者に頼むことも考えましたが余り芳しい話も聞かないため、休み毎に千葉から横浜まで通って自分の足で探しました。物見遊山も兼ねながら何度もこちらに通ううちに、たまたま東急田園都市線の駅近くの調剤薬局に入ったところ、そこの社長さんが協力してくださる事になり、いろいろの巡り合わせに感謝いたしました。今でこそ港北ニュータウ

ンの駅前には、デパート、スーパー、映画館、ショッピングセンター、果ては温泉施設までできにぎやかになりましたが、その当時には市営地下鉄は未だ開通しておらず、駅前は泥だらけで犬の格好の遊び場の様な状況でしたので、そこでおのずと開業場所も駅からは遠い所となってしまいました。地下鉄が開業した今となつては交通が不便になってしまい、その為かどうか(？)、幸か不幸か私の体力に応じた患者数に落ち着き、のんびりやっております。千葉での予備練習のお陰で、ここ横浜では非常に優秀で優しい素晴らしいスタッフに恵まれて助けていただいています。

35年間、細く長く曲りなりにも診療と家庭を両立すべくやっけてまいりました。夫が留学中には子供としっかりと向き合うこともでき、また地方に転勤の時には細々とパートの仕事をし、子供が自立するとともに再度常勤勤務に戻りました。多くの人達に支えられて来た幸運に恵まれましたが、今の初期臨床研修～専門医研修ではこうはいかなかったでしょう。医局制度による卒後研修は閉鎖的で卒後教育の標準化に問題あり、と批判されていますが、私の生きていた道は“懐の深い”医局制度による卒後教育ではなくてはありえなかったと思います。振り返ってみますと、本当にいろいろな方に助けていただきながらどうにか過ごしてまいりました。

改めて、この場をお借りしまして心より御礼申し上げます。

順風満帆？

生後8ヶ月で助けられたと聞かされ続けた横浜市立大学医学部を、昭和63年に卒業致しました。子供が大好きでしたし、律儀な性格でしたので、ご恩返しに幼いころから小児科医になりたいと切望していたのです。ところが、大学5年生のポリクリで最初に回ったのが皮膚科実習。当時の永井隆吉教授と中嶋弘助教授（現名誉教授）の外来診察やその後の

山川有子

山川皮ふ科
(横浜市神奈川区)

解説を聞き、1週間で自分の進路を変更し、決定。5年生の1週目からは皮膚科医を目指しました。大学院、留学、協力病院勤務を経て、横浜市立大学附属市民総合医療センター皮膚科に勤務し、その後準教授、部長を仰せつかりました。そのありがたさを決して忘れることはありません。これまで多くの先生方に多岐に渡りご指導賜りましたことを心から感

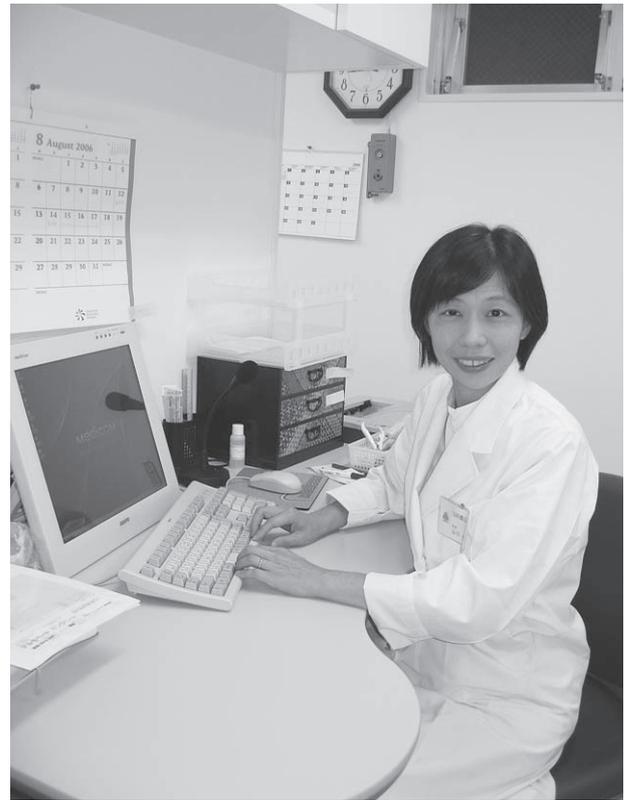
謝申し上げます。

平成18年7月3日からJR横浜線大口駅西口徒歩1分のビルに開業させて頂きました。皆さんが、順風満帆といってくださいますが、実はたいへんな開業でした。7月2日、神奈川県皮膚科医会の40周年パーティの日が内覧会にぶつかってしまっていました。その日の未明、突然、私の義兄が倒れそして急逝してしまっただけです。姉は同じ神奈川県で内科クリニックの院長をしており、義兄は体調が優れないものの副院長として頑張っておりました。まだ47歳の若さでした。まさに内覧会の始まる時間、私の目は真っ赤でした。開業初日は予想より多くの患者さんがいらしてくださり、慣れない電子カルテの検査や処方を入力し、何とか診療をこなそうと努力。無事に終了してから電子カルテの入力をして帰宅したときは、2日間あまり寝ていないのもあって、ふらふらでした。お通夜、告別式と慌しく、最初の一週間が非常に辛く、今思い返しても無我夢中ではあるものの非常にしんどかったのです。

もともと診療のスピードが遅く、患者さんのお話をよく聞いてしまうので、1年経った今でも、時に患者さんのお話にはまってしまふとたいへんなことになっています。待ち時間の節約、医療費の軽減のためにも、「治ったらいらっしやなくて結構です」と連発しているせいもあって、最近、新患以外は治らない人、ばかり。やや自信消失しそうです。

子供さんに多く来院していただきたくて、キッズスペースを作りました。ごく稀に、子供さんが多すぎて、イモ洗い状態になり、飛び火や水疔などがうつるのではないかと心配してしまいます。子供の笑い声と泣き声と、疣を焼きながらの「先生なんか大嫌い」の罵倒の声に励まされ、毎日とても楽しい診療です。また、大学病院の患者さんのご希望で当院にわざわざ来てくださる方もいらっしやることは、たいへんありがたいことです。

そしてスタッフに恵まれたことは、この上ない幸福です。看護師は常時1人ないし2人で、そのお2人とも気立ての良い温かい方で患者さんがほっとす



ようなお人柄です。腕も相当よく、どうしても治りの悪いアトピー性皮膚炎の乳児からも余裕で簡単に採血を成し遂げます。受付2人はたまたま2人も同い年で意気投合し、いまだきの若い子には珍しいほど素直でいい子たちです。

こうして考え直しますと、やはり、順風満帆といえるのでしょう。

私が今目指すのは、重病の私をあのとき病院に紹介して下さった地元の小児科の先生（その後もずっとかかりつけ医でした）のように、地域の皆様に少しでもお役に立つことができること、です。

諸先生方、今後とも何とぞよろしくご指導ご鞭撻賜りますよう、お願い申し上げます。

山川皮ふ科

〒221-0002

横浜市神奈川区大口通57-2 トップアングルビル2階

TEL : 045 - 432 - 1107

FAX : 045 - 432 - 1307

<http://www.myclinic.ne.jp/yamakawahifu/pc/>

開業13年目の感想

大澤純子

大沢皮フ科
(川崎市中原区)

早いもので、開業したのが平成6年12月なので13年もたってしまいました。宮本先生から何か書けとのことなので、思いつくままに書きましたが、結果は私の愚痴のようなものなので、お忙しい方はどうぞ飛ばしてお読みください。

開業場所は東急東横線の元住吉駅から徒歩で2～3分の商店街のとあるビルの2階です。

先輩の先生方から開業するなら駅のそばといわれていましたし、長年住んでいて土地柄を熟知していたことから決めました。開業当初は新しく開業した医師が誰でもそうであるように、1人でも多くの患者さんにきてもらって早く軌道にのせたいと一生懸命だったと思います。一方で、開業しても学会発表や論文発表を継続していらっしゃるK先生やA先生を手本として、診療のみに埋没しないで頑張ろうと心ひそかに思っていました。

初めは30人位だった患者数も徐々に増えて、数年で軌道にのり借金も返し終わりました。

しかし開業して5年も過ぎ、患者数も安定してくると、いつのまにやら初心を忘れ、毎日が同じことの繰り返しのようでつまらないと感じるようになっていました。

以前、開業の先輩から聞いていた通りです。こういう時、人（医師）は大体、趣味、スポーツ、医師会活動、社会奉仕、浮気、子育て（孫育て）等々に活路（逃げ道）を見出すようです。私もどれとはいませんが、いろいろと悪あがきしました。

今もまだ、自分なりの道を見つけたとは思えません。

開業医として最初に心がけたことは、とにかく大学や大病院と違って身近でかかりやすいんだから、親切的な医者になろうということです（どうあがいても名医にはなれっこありませんし）。患者さんの目線に立ち、よく説明することです。

しかし、最近あまりに医師の説明責任ばかり強調されると、これにも疑問を持つようになりました。



皆さんも患者さんから聞かれますよね。

「虫さされです」というと「何の虫ですか？」。

「蕁麻疹です」「原因はなんですか？ 内臓が悪いからですか？」。

「いぼです」「なかなか治らないのはどこか悪いんでしょうか？」等々。

内科でも「風邪です」というと「なんでかかったんでしょうか？」といわれるんでしょうか。皮膚科の病気は患者さんの目にみえるからごまかしはききませんし、かえって説明しにくいように思います。特に私のように何のオーラもない皮膚科医は、限られた時間のなかで的確に説明し、納得してもらおうワザを磨かなければと、日々実感しています。

さて、最近勤務医の過酷な労働状況から開業へのシフトが起り、開業医の競争激化も心配されています。また産婦人科、小児科、外科からマイナー科へのシフトによる皮膚科医の増加、それによる競争の激化、皮膚科医の生き残り美容医療の問題など将来的に心配な点もあります。小心者の私には自分の老後の問題以外にも、今後ますます一開業医としての心配の種はつきそうもありません。しかし、日本がある程度豊かな国であり続ける限り、「quality of life」こそが重要であり、その点において、皮膚科医の未来も捨てたものではないと思うことにしています。